

## 〈2〉 シラバスに基づいて授業が展開されているか

### 〈〈大学全体〉〉

シラバスに基づいた授業を展開すべく詳細なマニュアルを付した依頼文書《資料IV-3-14》により記載事項の統一を図っている。本学のシラバスにおける記載事項は、「到達目標」「授業内容」「授業計画」「授業運営」「評価方法」「オフィス・アワー」「使用書・参考書」であり《資料IV-3-4、IV-3-11》、授業計画内に時間外学習（予習・復習等）の指示を具体的に記載すること等の留意事項を記し、作成依頼している。さらに、記載内容の改善と標準化を目的として、2012年度から専任教員によるシラバスの確認体制も導入している。「授業計画」は半期15回分につき内容の違いが理解できるよう記載されているか等を確認することとし、シラバスの質の維持と向上に取り組んでいる。全学で隔年実施している授業アンケートにおいて、「シラバスの授業計画通りに授業が進められていましたか」という質問項目を設定しており、直近の2012年度集計結果《資料IV-3-15 No. 38》では、全体集計において否定的な回答「あまりそう思わない」及び「そう思わない」は3.6%に留まる一方、肯定的な回答「そう思う」及び「ややそう思う」は過半数を超える63.9%であった。学年別の集計で見ると、肯定的な回答「そう思う」及び「ややそう思う」は4年生が最も高く71.4%、否定的な回答「あまりそう思わない」及び「そう思わない」は3年生が最も高く6.1%であった。

### 〈〈1 法学部〉〉

シラバスの内容については、全学的な方針《資料IV-3-14》の下、各教員がシラバスを執筆し、専門分野ごとにシラバスチェック担当者が確認作業を行っている。

### 〈〈2 経済学部〉〉

専任教員と非常勤講師共同の複数開講制を行っているが、講義内容は相互に連携を取って調整している。授業アンケート《資料IV-3-15 No. 38》によってシラバスと講義内容の整合性を検証している。

### 〈〈3 経営学部〉〉

本学では、隔年で授業アンケートを実施している。2012年度の集計結果《資料IV-3-15 No. 38》によると、本学部生のうち、前期では62.8%、後期では65.6%が授業はシラバスの授業計画どおりに授業がすすめられたと回答している（「そう思う」と「ややそう思う」の合計）。

### 〈〈4 外国語学部〉〉

シラバスは前期と後期、それぞれ15回の講義・演習内容を記載し、非常勤講師が参加する会議においてもシラバスに基づいた授業を実施するように周知徹底を図っている。導入当初は記載が統一されず、混乱した時期があったが、現在はシラバスの記載を原則とした授業運営がなされている。

### 〈〈5 人間科学部〉〉

全ての授業科目についてシラバスが作成され、その内容に基づいて授業が実施されている。シラバスの内容は全学的にフォーマットが定められており《資料IV-3-14》、専任教員はもとより、非常勤講師に対しても、関連する科目の専任教員が授業内容等について打ち合わせを行い、シラバスの作成を依頼している。

シラバスの記載に不十分な点がないかどうかを確認するために、全科目のシラバスの入

稿が終わった時点で、コース主任を中心する複数の専任教員が点検《資料IV-3-16 p. 55 項目 85》し、必要に応じて加筆修正を依頼している。

#### 《6 理学部》

シラバスに準拠した授業展開に努めている。複数担当者が同一科目を担当する授業が多くなっているため、担当者間での調整を綿密に行っており、シラバスの書式を統一するなど、授業との対応を明確にしている。これらの効果を授業アンケート《資料IV-3-15 No. 38》でも確認している。

化学科では大学院進学を促す特進ステージ《資料IV-3-17》を設け、さらに留学を視野にいった化学国際交流を授業科目として開講し、海外の大学との学术交流を推進するため指導がなされている。

#### 《7 工学部》

複数担当者による科目は、担当者間で打合せを行って、また、非常勤講師に担当を委嘱する際は、最も近い分野の教員が打合せを行って、シラバスの原稿を作成している。各シラバス原稿は、必要事項が記載されているか学科・プログラムの教育委員がチェックしている。また、実際にそれにそって授業が行われているか、授業アンケート《資料IV-3-15 No. 38》でチェックしている。

#### 《8 法学研究科》

シラバスの記載事項を法学研究科の運営委員が点検し、不備な点の書き直しを要請している。この結果、2012 年度からシラバスは詳細に記載されるようになった。これに伴い、ほとんどの科目はシラバスに基づいて授業が展開されている。

#### 《9 経済学研究科》

博士前期課程、博士後期課程とも、基本的にシラバスに基づいて授業を展開している。ただし、大学院生の理解度や問題関心を考慮して、授業内容と関連する派生的問題への言及などを行っているが、これはシラバスに記載した授業の目的を達成し、授業内容を消化するための教育上必要な措置である。

#### 《10 経営学研究科》

各講義の成果が期待通りに出ているかに関して全研究科を対象に行っている「学習環境満足度調査」《資料IV-3-18》などを通じて確認し、評価指標としている。研究科委員長、大学院学務委員等の教員と大学院生との意見交換も活発に行っており、大学院生の要望を反映させるようにしている。教育手法は、理論的取り組みで講義する教員もあれば、実際の企業におけるケースを重点的に議論する応用・実践的教育と、教員によってその教育手法は異なる。しかし、シラバスにそった講義をするよう研究科全体の合意が形成されているため、学生はどのような内容の授業であるか、シラバスを精読することによってほぼ正確に把握することができる。

#### 《11 外国語学研究科》

本研究科のシラバスには、半期 15 回の各回の授業について事前に計画を明示してあり《資料IV-3-11》、教員は原則としてその計画に沿って授業を行っている。但し、本研究科の場合、「専攻科目」「関連科目」の履修者は1～6名、「演習」の履修者は1～2名、という少人数教育である。それゆえ、「演習」のみならず「専攻科目」「関連科目」についても、授業は双方向的であり、履修者による授業内容の吸収度を確かめながら授業内容を調整す

ることが望ましい。この点を考慮し、シラバスには、授業内容が状況に応じて若干変化する可能性があることを明記している。

なお、シラバスに基づく授業が実施されたかどうかについて、2014年度後期から担当者と履修者の両方にアンケートを実施することを、外国語学研究科委員会において申し合わせた（2014年10月）。

#### 《12 人間科学研究科》

本研究科では、本研究科委員会委員が年に1回シラバスの審査を行い、記述が不十分な場合には加筆修正を依頼している。また、非常勤講師との懇談を毎年実施し、授業内容についての意見交換・検討を行っている。

#### 《13 理学研究科》

シラバスは毎年改訂され、教務委員がチェックし、内容を精査している。しかし、シラバスに基づいて授業が展開されているかは、各担当教員に任されている。

#### 《14 工学研究科》

「工学研究科授業評価アンケート」《資料IV-3-12》によってシラバスに基づいて授業が展開されているか点検をしている。当該アンケート項目「この科目のシラバスに書かれている目標を達成できましたか？」の回答の多くは「そう思う」と「まあそう思う」であり、シラバスに従って授業が行われているといえる。

#### 《15 歴史民俗資料学研究科》

当研究科で開設している授業科目は、すべて、到達目標、授業内容、授業計画、授業運営、評価方法、オフィス・アワー、使用書・参考書の項目で、統一してシラバスを作成しており《資料IV-3-11》、それに則って授業は行われている。